研究ノート

性の自己受容とカミングアウトに関する諸問題

鶏内泰寛

問題提起

近年ＬＧＢＴという言葉を報道で見ない日がないほど、ＬＧＢＴという言葉が定着した感があり、社会的にも人権問題の一つとして確認されています。ＬＧＢＴに関する研究はまだまだ熟していないのが現状かと考えますが、仏教界においても精査すべき時期にあると考えます。そこで、性的マイノリティーＰＴ部門では、二年間の計画でＬＧＢＴの基本的な知識、現行の法律、相続、会社での雇用問題などの社会的現状の整理を行い、その上で寺院に関するＬＧＢＴ問題を当事者的観点及び社会的観点の両面から考察することを目的とします。先ず、ＬＧＢＴの基本的な知識、社会的現状の整理を行うために「性の自己受容とカミングアウトに関する諸問題」、「アライとアウティングの諸問題」、「法律、福利厚生の諸問題」、「就職、職場における諸問題」の四テーマに分け、それぞれの問題に対し担当研究員を設け対応することとしました。今発表は、四テーマのうちの「性の自己受容とカミングアウトに関する諸問題」について取り上げたものとなります。

ＬＧＢＴとは、性的マイノリティの総称でＬがレズビアン（女性の同性愛者）を表し、Ｇがゲイ（男性の同性愛者）を、Ｂがバイセクシュアル（両性愛者）を、Ｔがトランスジェンダー（性別越境者）を表しています。しかしＬ

ＧＢＴだけで全ての性的マイノリティを表現できているのかというとそうではなく、場合によってはＬＧＢＴＩとかＬＧＢＴＩＡＱなど、表現の仕方は多種に上ります。因みに、Ｉはインターセックス（両性の外的特徴を持つ人）、Ａはアセクシュアル（性的要求のない人）、Ｑはクエスチョニング（自身の性に迷っている人）を表します。この項目で全てを取り上げるというのは困難なため、殊にＬＧＢＴに焦点を当てて述べることとします。

※欧米では、性自認や性的指向が定まっていない人のことをQuestioning（クエスチョニング）もしくはQueer（クィア）と呼ぶのが一般的ですが、日本では「Ｘジェンダー」という呼び方の方が定着している感があります。「Ｘ」は数式でいう変数、つまり「色んな何か」が入るという意味で、性自認や性的指向に両方の可能性を含みます。

※ＦＴＭ／ＭＴＦは、「Female To Male（女性から男性へ）」「Male To Female（男性から女性へ）」の略称です。心の性別と身体の性別が一致していない状態で、異性として、つまり身体が女性なら男性として、身体が男性なら女性としての性自認があります。それ故、性適合手術を望む場合が多い傾向があります。また、ＦＴＭ／ＭＴＦは、「Female To X」「Male To X」という意味で、Ｘは「Ｘジェンダー」を表します。心の性別が異性から中性寄りになっている方が多く、その多くは性転換手術までは望まない傾向にあります。

性の自己受容

人間の性は、生物学的にもっている体の特徴が男性なのか、女性なのかという①生物学的な性（体の性）、自分自身を男性だと感じるのか、女性だと感じるのかという生物の自己認識である②性自認（心の性）、恋愛感情や性的な関心がどの性別に向いているかという③性的指向の三つの要素によって決定されます。たとえば、レズビアンは①生物学的な性は女性であり、③性的指向も女性であるということになります。同じようにゲイは①生物学的な性は男性

であり、③性的指向も男性であります。バイセクシュアルは③性的指向が男性にも女性にも向いている人であり、トランスジェンダーは①生物学的な性と、②性自認が一致しない人を指します。性自認や性的指向を決める要因には、先天的な要素もあれば、後天的な要素もあるかと思います。様々な事柄、要因が影響しあって、その人の性のあり方を決めているのです。

性の多様性

我々は、ＬＧＢＴの人々を性的マイノリティーとみなし、おおよそ異質なものとして考えてしまってはいないでしょうか。しかしながら実は、自然界において実際に同性間の性行動が確認されています。ピグミーチンパンジーではメス同士、キリンではオス同士の性行動が頻繁に見られるという報告がなされています。乳牛ではメス同士の性行動が頻繁に見られ、その行動をもとにどの牛が妊娠可能になったのかを見極める一つの目安となっています。また、魚のカクレクマノミは、体の大きさに応じて性の転換が行われます。自然界を見れば性は多様であることが分かります。実に一五〇〇種を超える動物において、同性間の性行動が確認されているのです。

ここで生物学的な性、性自認、性的指向を人間の男女に当てはめると、何種類に分けられるのかを表した表を示すと**図1**のように一八通りに分類できます。人間においてもこれだけの多様性があり、ストレートと呼ばれる人は一八分の二通りでしかないのです。人間も動物であることを考えると、ＬＧＢＴはごく自然なことであると捉えることができるのではないでしょうか。しかしながら、現実的には宗教的、歴史的背景から同性愛を犯罪とみなして刑罰の対象としてきた事実があります。現在、同性愛が禁固刑や死刑の対象となる国は八一ケ国（国際ＬＧＢＴＩ連盟、二〇一五）に上り、特にアフリカや中東諸国に集中しています。その背景には、アフリカではソドミー法（旧約聖書にソドムの町が人々の退廃によって神の怒りを買い、滅ぼされたとされる。その退廃は同性愛と解釈された。）の影響が

ありますし、中東諸国ではイスラム法の解釈によって同性間の性交渉を禁じている影響があるのです。かつて日本においては性に対する罪意識は弱く、比較的自由な性行動が営まれる傾向がありました。しかしキリスト教の宣教者たちは日本人のおおらかな性習俗を不道徳であると非難し、日本政府は明治初期にソドミー法に相当する鶏姦条例を設け、違反者は九〇日の刑に処せられました。このような歴史から日本でも同性愛に対する罪意識のようなものが現在も存在しているのかもしれません。

体の性	心の性	好きになる性	
典型的女性♀	♀	♀	1
		♂	2
		♂♀	3
	♂	♀	4
		♂	5
		♂♀	6
	♂♀	♀	7
		♂	8
		♂♀	9
典型的男性♂	♀	♀	10
		♂	11
		♂♀	12
	♂	♀	13
		♂	14
		♂♀	15
	♂♀	♀	16
		♂	17
		♂♀	18

図１：男女の性パターン

性別違和の時期

トランスジェンダーや性同一性障害の方が性別違和を感じだすのはいつ頃なのかを調べたものが**図２**です。これは、一九九九～二〇一〇年に、岡山大学病院ジェンダークリニックを受診して性同一性障害の診断を受けた一一六七人を対象としたデータです。小学校入学までに五六・六％、小学校卒業までに八〇・〇％の子どもたちが性的違和を感じていることが分かります。子供たちは性別違和のサインを出していることがあります。たとえば「男の子の服を着たがらない」、「女の子の服を着たがらない」、「トイレに入るのを見られたくないから授業が始まるとトイレに行く」、「更衣室で着替えられない」、「プールに入れない」、「健康診断は受けたくない」、「宿泊行事に参加したくない」など。

特に学生服の着用は、性別違和をもつ生徒にとって大変なストレスになっていることがあります。「自分は男なのに、なぜセーラー服を着なければならないのか」、「おしゃれをしている女子がうらやましく自分がみじめになる」といった劣等感を抱えながら、日々の学生生活、社会生活を過ごすというのは、本人にとって屈辱的なことなのです。なぜ嫌がるのかを冷静に感じ取ることも必要かもしれません。特に二次性徴は、性的違和を持つ子どもには身体への嫌悪感、違和感を大きく感じる時期です。胸をつぶしたり、声を無理に出したり、外出ができなくなったり、さらにエスカレートすると「この先、どうやって生きていけばよいのか」、「このような性的違和を感じているのは世の中に自分一人ないんじゃないか」、「自分は気持ち悪い人間だ」という悩みから、引きこもりや摂食障害、自傷行為、自殺行為へと発展してしまうことがあります。このようなサインを見逃さないことも重要なことです。それには、性的マイノリティーに対する知識が必要ですし、受け手側のメンタル的な準備も必要でしょう。

宝塚大学看護学部の日高庸晴教授らがゲイ・バイセクシュアルの男性を対象に行ったインターネット調査（一九九九）が**図3**になります。一三歳の頃に性自認が始まり、二〇歳までの二次性徴時期に精神的に追い込まれ、場合によっては自殺を考えていることが分かります。同教授の他の調査では、ゲイ・バイセクシュアルの男性の実に六五・九％が自殺を考えたことがあり、一四・〇％の方が実際に自殺未遂を行っていることが判明したと報告しています。二〇歳

	全体（n＝1,167）	MTF（n＝431）	FTM（n＝736）
小学入学以前	660（56.6％）	145（33.6％）	515（70.0％）
小学低学年	158（13.5％）	67（15.5％）	91（12.4％）
小学高学年	115（9.9％）	56（13.0％）	59（8.0％）
中学生	113（9.7％）	74（17.2％）	39（5.3％）
高校生以降	92（7.9％）	77（17.9％）	15（2.0％）
不明	29（2.5％）	12（2.8％）	17（2.3％）

図２：性別違和感を自覚した時期

岡山大学大学院保健学研究科中塚幹也教授（2013）

「学校の中の『性別違和感』を持つ子ども　性同一性障害の生徒に向き合う」

を超えると社会も広がり、同じような立場の方や友達ができ、孤立感を解消できる一因を見いだせるようです。もし、もっと早くに性的マイノリティーの人々の孤立感、孤独感を解消することができたら、自殺行為を抱くようなことが減少するかもしれません。その為には、性的マイノリティーの方のことをしっかりと理解し受容していくことが、我々の側に求められることでしょう。

カミングアウトとその対象

まず最初にカミングアウトの定義を説明します。カミングアウトとは、LGBTなどの性的マイノリティーの人が、自分の性的指向や性自認を他者に対して告白することを言います。「LGBTの学校生活に関する実態調査」（二〇一三）にカミングアウトについての調査結果、**図4**があります。自分自身がLGBTであることを「誰にも言えなかった」という人は、「生物学的男子」で五三%、「生物学的女子」で三一%に上っており、いかにカミングアウトが難しく、悩みを抱えているかが分かります。このことからもわかるように「自分は性的マイノリティーである」ことをカミングアウトするのはかなりハードルの高いことなのです。ではカミングアウトした方は、どのような相手に対して行っているのでしょうか。**図5**を見ると、七二%が同級生をカミングアウトの対象として選んでいます。部活の友人も三五%あることから比較的同世代の者へ告白しやすいことが分かります。逆に両親や学校の先生などにはカミングアウトすることは少なく、互いの信頼関係が築けていないと言えるかもしれません。学生を対象とした調査においても、学校や先生が性的マイノリティの生徒を把握していなくとも生徒の返答では「友達にいる」、

できごと	平均
ゲイであることをなんとなく自覚	13.1歳
自殺をはじめて考えた	15.4歳
ゲイであることをはっきり自覚	17.0歳
自殺未遂（初回）	17.7歳
ゲイの男性に初めて会う	20.0歳
ゲイの友達がはじめてできる	21.6歳

図３：思春期におけるライフイベントの平均年齢（有効回答数1,025人）

日高庸晴教授他（1999年）
「ゲイ・バイセクシュアル男性のメンタルヘルスに関するアンケート」

「うちの学校にもいる」という回答があり、教師より生徒の方がこの問題に対して把握しているようです。しかしながら、ホワイトリボン・キャンペーン調査（二〇一三年）によると、ＬＧＢＴの方の七〇％が子供時代に何らかの形でいじめや暴力を受けていることが分かりました。また、不愉快な冗談やからかいなども蔓延しているため、なかなかカミングアウトできない状況もあるようです。

両親や祖父母、兄弟などには打ち明けやすいのではないかと考えてしまいますが、先に述べたようにそうではありません。「家族だから分かり合えるのでは」、「ＬＧＢＴであることを家族は知ってて当たり前」と思いがちですが、現実的には、家族という身近な存在だからこそ、分かり合うまで時間がかかることが多いようです。職場や同僚など周囲の人にカミングアウトしている人でも家族には打ち明けていないという人も多いのが現実です。カミングアウトすることで、両親や家族が混乱し、その結果、家族から拒否されたり、非難されたり、暴力を振るわれたりすることがあれば、若い時には生存そのものを脅かされることとなります。実際にこのことが原因で家出やホームレスに至っ

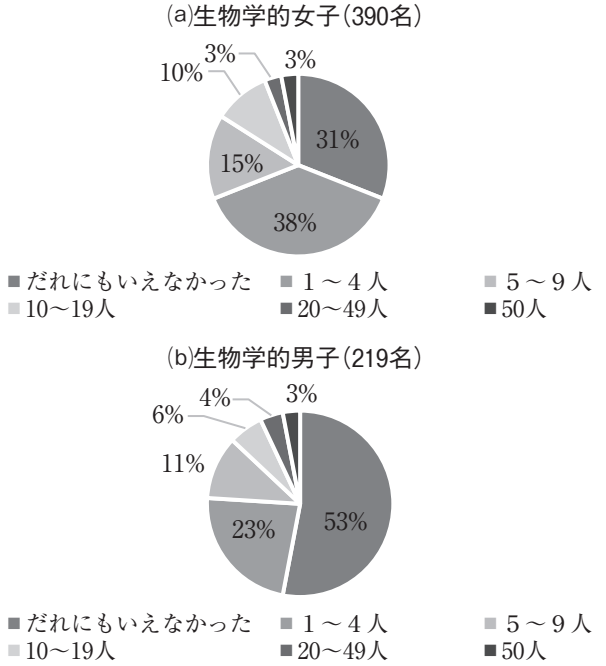

図４：小学生から高校生の間に自分がLGBTであることをカミングアウトした人数

ホワイトリボン・キャンペーン（2013年）
「LGBTの学校生活に関する実態調査」

てしまうケースもあると報告されています。このような状況からときに犯罪などへ誘因され、健全な自己肯定感を育むことが困難な状況におかれてしまいます。子どもが自分自身の生活を維持できるように、家族へのカミングアウトは慎重に行うべきです。

カミングアウトとその問題

ＬＧＢＴに悩んでいる子ども達は「だれが味方になってくれそうか。味方になってくれそうにないか」をよく観察しています。ＬＧＢＴを扱った報道などに対してもどのような反応を示しているか見られていると心得るべきです。また、日常的な言動に注視されていることに我々は殊に注意しなければなりません。日頃から性の多様性について寛容な発言、性的マイノリティに対する正確な知識を持っていれば「この人だったら信頼し、打ち明けられる」と安心できるでしょう。ＬＧＢＴと一口に言っても人それぞれ悩みは異なります。一緒に悩んでしまうこともあるでしょうが、そのプロセスも意味があると心得るべきでしょう。ＬＧＢＴの自分と真摯に向き合う他者がいるか否かは、本人の自己肯定に大きく影響します。本人と話し合いながら解

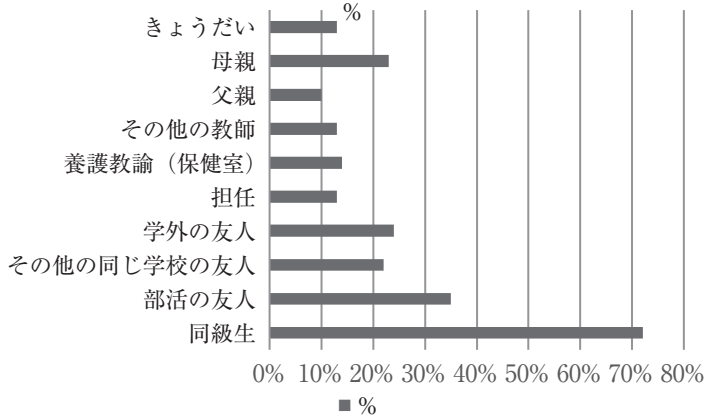

図５：LGBTであることをカミングアウトした相手（複数回答）
ホワイトリボン・キャンペーン「LGBTの学校生活に関する実態調査」（2013年）

決を模索していくように心掛けましょう。

さて、カミングアウトにおいて大きな問題となることがもう一つあります。それはカミングアウトを受容する側のキャパシティーです。カミングアウトは本人だけでなく、カミングアウトされる側にも大きなショックを与えるということです。打ち明けられた友人や親、教師が異性愛者であれば、ＬＧＢＴについて正確な知識を持っていないことも十分に考えられます。例えばＬＧＢＴの人は性の乱れがあると考えＨＩＶ（ヒト免疫不全ウイルス）によるエイズ（後天性免疫不全症候群）などの性感染症を心配したり、ＬＧＢＴそのものが病気であると決めつけ治療できないものかと考えたりします。これは、正確な知識がないために起こる不安であり、正確な知識を得ることで解消できる事です。また、「そんな子どもに育てた覚えはない」と絶望してしまうかもしれません。家族もまた、他人に相談できず抱え込んでしまう場合があるのです。これらの感情が当事者に向けられ、暴力などに進展し、家族関係が急激に悪化することも考えられます。ＬＧＢＴの家族を対象とした電話相談や機関にアクセスし、悩んでいるのは自分だけではないことを知るのも一助となるでしょう。

僧侶として考えておく事

ではカミングアウトにおいて我々僧侶にできることは何なのでしょうか。それは、ＬＧＢＴに対して正しい知識を持ち、性的マイノリティの方々を性を超え一人の人として受容していくことではないでしょうか。法華経は平等大慧の教えです。性的マイノリティの方も皆同じ仏の子です。何も違わないのです。仏様という親にとって子どもは、どんな性的指向であれ、自分の子どもなのです。ＬＧＢＴの方々に対する法号の問題やトイレなどの寺院施設上の問題、納骨を拒まれるなどの墓地の問題をはじめ、信行道場、祈願の善男子・善女人の問題など様々なことが考えられますが、先ずは尊い命を守るという視点から、性的マイノリティの方々からの相談や、またその家族の方々の悩みに寄り

添えるように、日頃からこの問題に関心を持ち、事前にＬＧＢＴの団体や相談機関の情報を蓄積しておくことが第一歩ではないでしょうか。また、当事者の意思を汲めるように、エンディングノートや事前指示書などの活用も有用ではないでしょうか。

多様な人々が生活している社会でＬＧＢＴの方々とより良く共生していくことは、我々日蓮宗が掲げるいのちに合掌の精神に合致するものだと思います。常不軽菩薩の「我深敬汝等。不敢軽慢。所以者何。汝等皆行菩薩道。当得作仏。」の意味合いをしっかりと心に持ち、お互いがお互いのいのちを敬い尊重し、より良い社会の礎を築いていきたいものです。

参考資料

・『職場のＬＧＢＴ読本』実務教育出版　著者―柳沢正和、村木真紀、後藤純一
・『ＬＧＢＴ問題と教育現場』学文社　著者―金井景子、薬師実芳、杉山文野
・『ＬＧＢＴの子どもに寄り添うための本』白桃出版　著者―ダニエル・オウェンズ＝リード、クリスティン・ルッソ
・『先生と親のためのＬＧＢＴガイド』合同出版　著者―遠藤まめた